

次に、伊藤文博議員。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。〔9番 伊藤文博君登壇〕

○9番（伊藤文博君）

清生クラブ、伊藤文博でございます。

5人目でお疲れのところですが、よろしく願いいたします。

本日は、1、「チーム糸魚川」「チーム市役所」を軸とした地域活性化について質問いたします。

米田市長は、新幹線開通を契機としジオパークを核とした地域振興に全市一丸となって取り組むため「チーム糸魚川」を結成し、職員の意識改革を推し進めることで官と民が相互の力を十分に活かせる糸魚川市にしようとしています。それには「チーム市役所」という取り組みも重要となります。

チーム糸魚川の結成から約1年が経過し、新幹線開通まで10か月を切った今、チーム糸魚川のメンバーそれぞれの能力が連携により十二分に発揮され、相乗効果で成長していく方向へ舵取りをしなければいけない時であると考えます。

チーム糸魚川とチーム市役所の取り組み状況や今後の方針について質問いたします。

- (1) 「チーム糸魚川」の現状と課題、対応策はいかがでしょうか。
- (2) 「チーム市役所」の現状と課題、対応策はいかがでしょうか。
- (3) 2者連携の現状と課題、対応策はいかがでしょうか。
- (4) 市職員が、あらゆる場面で民間企業・団体、市民の意見を十分に聞いて、建設的態度に終始することができていますか。
- (5) やる気のある若手職員を育てる、最低限、若手職員のやる気を削がない組織運営ができていますか。
- (6) 民間側のやる気を十分に活かそうとする職員の取り組み、民間側のやる気が実を結ぶような取り組みができていますか。また、そのような人員配置、組織づくりができていますでしょうか。管理職の対応は十分でしょうか。
- (7) 「チーム糸魚川」の各団体では、組織全体の意志徹底がなされていて、本当のチームの一員となりえていますか。
- (8) 「チーム糸魚川」として、日常的に意思の疎通が図れる仕組みが作られ本当のチームとなり得ていて、短期・中期・長期に効果を発揮する取り組みが期待できるのでしょうか。

以上、1回の質問を終わります。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

伊藤議員のご質問にお答えいたします。

1番目の1点目につきましては、現在、23団体から参加をいただいております、そのうち16団体

からなる幹事会において、26年度事業の取り組みについて協議をいただいております。

その1つとして、現在、糸魚川応援隊の募集を行っております。各団体が精力的に隊員獲得に取り組むことにより、チームワークを高めていきたいと考えております。

2点目につきましては、庁内が連携した市政運営に努めてきたところではありますが、より一層の連携が必要と考えており、全ての職員にチーム市役所との意識が浸透するよう努めてまいります。

3点目につきましては、市役所はチーム糸魚川の呼びかけ人であることから、率先して事業に取り組んでまいりたいと考えております。

4点目につきましては、職員に対して市民とのコミュニケーション能力の向上、及び地域活動への積極的な参画により市民の意識にじかに接し、職務に生かすよう促しております。

5点目につきましては、特に若手職員に対して重点的に研修を実施し、人材育成と組織の活性化を図っております。

6点目につきましては、職員研修等により意識改革、庁内連携、風通しのよい職場づくりに努めてまいります。

7点目につきましては、団体内の意思統一が図られるよう、幹事会を通じてチーム糸魚川の意義を確認するとともに、協力を呼びかけてまいりたいと考えております。

8点目につきましては、各団体の情報を共有するメーリングリストの運用を開始いたしましたところでもあります。情報を共有することにより、チーム糸魚川としての一体感を醸成し、チームワークを高め、次のステップとしては産業おこし、定住、交流人口拡大など、プロジェクトの取り組みを考えております。

以上、ご質問にお答えいたしました。再度のご質問によりましては、所管の部・課長からの回答もありますので、よろしくお願い申し上げます。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

1から8までは関連しますので、質問が前後することがあると思いますが、よろしくお願い致します。

行政改革大綱には、チーム糸魚川の推進として各種団体や行政が一体となって、定住人口の維持と交流人口の拡大により、30年後も持続可能なまちを目指しますとあります。

チーム糸魚川の発想は、これは素晴らしいと思うんですね。しかし、これを機能するものにするには大きな努力が必要だと考えますが、どう捉えていますか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

議員ご指摘のとおり、非常にこれは大変なことだろうとは私も捉えております。

やはり今までのいろんな事業、また、我々の課題を考えましたときに、一体感を市民の皆様方と

十

行政がしっかりと行わなければ、いろいろなものの目的が達成できない。そういう中でチームワークを高めることが、やはり一番大切と捉えて、今、取り組まさせていただいてるわけでございまして、我々といたしましても、なかなか難しいことであるわけでございますが、挑戦をさせていただいております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

まず、糸魚川を何とかしたいという気持ちは、誰もが同じようなものを持っているんですよね。しかし、それだけで連携をとって日常活動をしていくということは、非常に難しいことである。それができるぐらいだったら、改めてチーム糸魚川という取り組みは必要なかったわけですが、いろいろな方が、それぞれの立場や考え方で地域振興に取り組んでいるものが、横の連携がなかなかとれないという中で、チーム糸魚川という発想ができ、今度はそこからまとまりだけではなくて、お互いの力の連携によって、より大きな力を発揮するということが期待される。本当の1つのチームに糸魚川市全体がなるというところまで考えていくと、非常に理想的な姿なわけですが、しかし、その思いを現実にする事の難しさというのは、今、市長も語られました。

その高い山を、何としても越えようとする強い意志と覚悟が必要である。その難しさを全員が共有して持っていて、志としてそこを越えて1つのチームをつくり上げるという覚悟は本当にできているかどうかですね。認識はどうでしょうか、職員の皆さん。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

金子総務部長。〔総務部長 金子裕彦君登壇〕

○総務部長（金子裕彦君）

お答えいたします。

市の行政目標に向かって、日々業務をしてるわけでございます。そういう中で市長がおっしゃっておられますチーム糸魚川という形で、市民と市役所職員が一体となって地域振興に努めていくということが、非常に大切であります。市長が今おっしゃられましたように、非常に難しい課題ではありますけれども、庁内においてはチーム市役所ということで職員が連携をさらに強めて、それぞれの役割が重なり合って業務が遂行されているわけでありますので、その仕事のつながり、業務の流れ、こういうことを意識しながら取り組んでいこうということで、現在のところ道半ばの部分もございまして、一丸となって取り組んでいくことが、先ほど来、ほかの議員さんの話題にもなっております人口減少対策等、当市の大きな課題に取り組んでいく基本となるものと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

そういう考え方は概念として、これは多分みんなが理解できるけど、本当にそこを乗り越えてい

くというのは、相当な覚悟が要りますよ。そこのところを問うておるんで、これからの質問の中で提案をしていきたいと思っていますが。

まず、公務員の心得とは何かということ、チーム市役所という考え方なんですけど、いろいろな言葉がありますが、例えば誇りと使命感を持って国家と国民の役に立つ、尽くすこと。これは糸魚川市と市民の役に立つこと、尽くすことということになると思うんですけど、どこまで踏み込んだ取り組みをするかということが、非常に大切であります。

庁内の異動によって次の担当者に対する配慮により、ほどほどの対応にとどめてしまう。次の担当者のやる気が、これは1つの課題となってきますが、つまりここを打開するには、全員が同じ方向を向いた取り組み、全員が同じ方向で、同じような熱意で仕事をしているから、自分が熱意を持って取り組んだものは、次の担当者が必ず引き継いでやってくれるんだというような信頼関係が生まれてこないと、なかなか全力投球できないというようなことがあると思うんですね。やっぱりこういう状況というのが、今の多分組織の中であると思うんですけど、これを本当に打開していくのは、相当なエネルギーが要る。こういうことを、ちゃんと考えられていますでしょうかね。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

今ほどのご指摘のように、今、いろんなところで、いろんな活動もしとるわけではありますが、これから今までの一般質問の中にもありましたように、より以上のものを、これから求められるわけです。それを少なくとも今以上のことを考えるには、今までと同じことではだめだということから、スタートをさせていただいてとるわけです。それには、やはり市民と一丸となっていく、そしてまた市役所も一丸となっていくというところで、今、チーム糸魚川であり、今、議員ご指摘のチーム市役所なんだろうと思っと思つとるわけでありまして、でありますから1つの目標を、今、立ち上げさせていただきました。

確かに今まで、それは逆に大変なところで、それはもう基本だろうというようなことで、思っている部分だけでやってきたんですが、もっと明確にしてそれに向かっていこうというような形で、今、取り組まさせていただいております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

チーム市役所という現状、課題に対して、やはり縦割り弊害の排除というのは非常に大きなポイントだと思いますが、これは形づくられた会議ではない場面が、非常に重要になってくると思う。さまざまな場面で、関係する必要な人々が臨機応変に集り、協議できるような体制というか体質ですね、習慣が必要である。話し合いの内容を知っている必要がある人がその場にはいないと、最も重要なことは後でもう1回話をして伝える、これは熱が伝わらない。これは最も重要なことです。それから再度、話をするによって落ちることもあるし、それから後手を踏む。いつでも声かけを

すれば、可能な限り集まって協議する。柔軟でフットワークの軽い対応が必要だと思いますが、このような考え方ってどうでしょうか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

田原総務課長。〔総務課長 田原秀夫君登壇〕

○総務課長（田原秀夫君）

お答えいたします。

1つの事業に取り組むときに、庁内が連携をして取り組まなければいけないと、市長からは市政運営会議、また部課長会議の場で指示を受けております。こういう定期的開催される会議の中で情報を共有をして、方針の決定、また、意思の共有を図ってまいるといってございませう。

また、課におきましては課内会議、係内会議を、これも随時、あるいは定期的開催をして、職員のコミュニケーションを図る中で情報の共有をし、また、応援体制を組んで事業に取り組むように、そういうように職員に促しております。

以上でございます。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

その範囲だと、縦割りの中なんですよ。それで例えば総務課で協議会をしていると、そのときに産業部のかかわる仕事から部長を呼んでくる、商工農林水産課長を呼んできて、担当の係員も呼んで一緒に協議をするというような、フットワークの軽い体質をつくっていかなくちゃいけないということだと思んですけど、意味が違う。その範囲は、あくまでも縦割りの範囲です。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

金子総務部長。〔総務部長 金子裕彦君登壇〕

○総務部長（金子裕彦君）

お答えいたします。

それぞれの案件については、課題解決のために非常に難しい状況のものがたくさんあります。その状況に応じて、当然、係、課でいろんな業務の打ち合わせ等をやっておりますが、大きな課題で解決が非常に難しいものについては、当然、部を超えた協議をやっておりますし、各部長がそれぞれの状況に応じて対応し、部を超えた連携をするように、そのようなコーディネートの対応をいたしております。そういう中でチーム市役所として、連携した課題解決に当たっていかうということでの取り組みをいたしております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

我々から見ても、市民一般の市とかかわる人たちからも、そこはやっぱり弱いんですよ。だから

今言われるような、僕が言ってるのは会議というような枠じゃないところで、臨機応変に対応するような体質が必要であるということですから、今後、ぜひ取り組んでいてもらいたいと思います。

横の連携がうまくいってない例として、先ほどちょっと担当課のほうに話しておきましたが、きのう行われた、ヒスイの里山岳マラソン。私も前日の土曜日に気づいたんですけど、何と市のホームページのトップページから入るイベントのところですね。すぐ月間イベントカレンダーというところに入れるんですよ。載ってないですね。15日、日曜日は、海谷溪谷ジオサイトジオパークツアーだけ載っていて、消防団の訓練も出ていませんし、それからヒスイの里山岳マラソンも出ていない。市のホームページの中で、ヒスイの里山岳マラソンと検索かけると、去年の結果は出ておりますね。ことしの予定はゼロ、全くチーム市役所は機能していないんじゃないかというふうに言われると思いますよ。どうでしょうか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

田原総務課長。〔総務課長 田原秀夫君登壇〕

○総務課長（田原秀夫君）

ご指摘の点、私、昼休みに確認をいたしました。トップページから入ります市のイベントカレンダーのところには、確かにございませんでした。この掲載については、各課各担当係が記事を作成をして、そこにアップするということとなっておりますが、漏れている部分がほかにもあると思いますので、そういうところは総務課の広報情報係で、もう一度全般的に見回して確認をしていく。漏れているものがないのか、あるいは古いものが、更新されていないものがあるのではないかと、そういうチェックを再度いたしたいと思っております。

なお、観光情報からいく年間のイベントカレンダーのところには、山岳マラソンは載っております。また、これをリンクさせて、市民から見やすくなるようなホームページの内容にしていきたいと思います。

以上です。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

そのページの不備は、たまたまあったかもしれませんが、ただ、やっぱりそれがチーム市役所ができてない、もうそのあらわれだということになると思うんですよ。だから横の連携のとり方、縦割り弊害の排除なんていうのは、もうずっと言われてきたわけですけど、本当の意味で、チーム市役所が機能するようにはしてほしいということで質問していますので、そこがだめだ、だめだというふうに責めるつもりは全くないんですけど、やはりそれが1つの例であるというふうに考えています。

やはり自分が知っていればいい感覚の人、自分の担当の部署、自分が知っていてやれば、それで実行できると思ってる人は、必要な情報提供や共有ができにくいんですよ。これはそういう人は、なかなか変わることができない。そこで個人差の生じないシステムだとか、プラスそれぞれの思いや意識での、他人の不足を補うほどの熱意ある取り組みが必要になってくる。そうしないとチーム

糸魚川として、なかなか機能しないと。ここはやっぱり意識改革から生じてくると思うんですけど、こういうことについてはどう考えますか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

やはり縦割りという1つの見方を見ていくと、今、議員ご指摘のところもあると思うわけでございますし、公務員としての研修というものを通じて職員が成長して、またその職務に当たっていくんですが、しかし、なかなかそれでいくと変わらない部分がございますので、今、ご指摘の点だとか、やはりこれからの新たな展開の中で、大きな役割を各地方の都市がやる中において、公務員の果たす役割というのは非常に大きくなってくるんだろうと思っております。

そういうときに我々は、それに応えていけるような公務員になってもらいたいという形では、新たな気づきをわかるような、これから講習とか講演会とか、逆にそういうものを意識的に選んで講習をしながら、気づきをやはりしていかなくていけないんだろうと思っております。そのようなことで、ここ一、二年前から、講習会、講演会のやはり内容を変えさせてもらっている部分もございます。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

市役所がチームとなり得るかどうかですね。チーム市役所という考え方というのは、これは誰もが認める非常に聞こえもいいし内容も伴ってくれば、ぜひそうなってほしいと思うところである。しかし、これもチーム糸魚川と、ほとんど同体ですよ。やはり実現することは非常に困難であるし、言葉やキャッチフレーズだけに終わらないようにするには、やっぱり相当な努力が要る。だから、そのチーム糸魚川ということに対して、改めて取り組んでいく仕組みみたいなものが、今までの業務の中でチーム糸魚川という考え方を取り入れていくだけではなくて、やはり何かそこに1つ地に足を踏ん張って、何か考えていかなきゃいけない。やっぱりそれをやるだけの覚悟が要ると思うんですよ、やり遂げるという覚悟です。このままいくとずるずると、日常業務の今までのやり方の中で、考え方だけが上滑りしていくというようなことになりかねないんじゃないかなと思うんですけど、どうでしょうか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

やはり私もそのような危機感を感じております。練り上げて、そういう形をつくって、こういう活動をしていこうというところまではいくんですが、一旦できてしまうと、その枠の中でとどまって

しまう部分があります。我々は、その枠の中のそういったものをつくるわけではなくて、その背後にある目的があるわけでありますので、それに向かっていかなくちやいけない部分があるんですが、なかなかそういうところについてないのも現実であると思っております。

やはりどうしても年度という1つの枠の中でとどまる部分もあったり、そういう非常に今までの長い、これはいい面もあるわけでありますが、しかし、悪い面がそういうところに、随所ある部分があると思います。その辺を、どのようにそれを超えていけるか、それをやはり排除できるかというのも、このチーム糸魚川やチーム市役所の中で、取り組まなくてはいけない点だろうと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

本当にそのとおりなんですよね。だからチーム糸魚川化のためにも意識改革が必要である。そういう意味で、市長の公約もあったんだと思うんですけどね、職員から見れば意識改革云々と言われても、何をどう改革すればいいかわからない。現状の何が不足で、あるいは何が悪くて、どう変えていかなければいけないかというところがはっきりしないと、意識を変えてみようもない。みんなそれぞれ一生懸命やってる、おれだって一生懸命やっとなるわねという話の中ですから、それが明らかになってるかどうかです。行政改革の中で意識改革を言ってますが、さあ、意識改革の必要性というものが、果たして具体的に提示されているかどうかですね。どうでしょうか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

金子総務部長。〔総務部長 金子裕彦君登壇〕

○総務部長（金子裕彦君）

一口で意識改革といっても、なかなかわかりづらいところもありますけれども、それぞれの業務の範疇がどのようにつながって、市民の幸せのために市の職員が仕事をしてるかというところでは、繰り返しのそういう気づきだと思っております。気づいて、さらにそれを克服するために学んで、また、多くの皆さんとそれらの気づきについての知恵をもらったり、あるいは自分では気づかないところを、ほかの方から教えていただいたりというような形での気づきの繰り返しと学びの繰り返しを、本来の市の業務の目的とするところに向かってそれぞれが考え、それぞれが議論しながら意見を出し合って進めていくというところが、意識改革の1つの方法ではないかというふうに思っております。

そういうことについては、繰り返し庁内での若手の職員の研修の機会、あるいは日常業務の中で部課長が話をさせていただいておりますけれども、そういうものも繰り返し、繰り返し組織の中で対応していくということで、意識の改革を1歩1歩進めていくということを継続的にやっていくことだと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。



## ○9番（伊藤文博君）

またちょっと繰り返す形になると思いますが、2者連携ですね。まちづくり、ものづくり、地域活性化に取り組む人たちが、市役所の担当部署の人と話をしていると、横のつながりの不足を感じることがよくあると、それはいろんな人から聞きます、そういう話を。同じようなことをやっているほかの担当課のことを知らなかったとか、こういう話は私もここでも何回もしてるんですが、チーム糸魚川内の連携とチーム市役所内の連携は、実は別々のものではなくて、一緒に組み上げられていくもんじゃないかと思うんですね。ですからチーム市役所という意識を高めていく過程が、チーム糸魚川の意識を高めていくというようなことになっていくというふうに思うんですけど、そこをやはり別々じゃなくて、一緒に考えていく考え方というのは重要だと思いますね、どうでしょうか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

## ○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

## ○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

まさしく、そのとおりだと思っております。私は市民の、また、地域の活性化を考えたときに、やはりプレーヤーは市民で、行政はサポーターだという形で、ずっと進めてまいったわけですが、そこでここへきて、なぜ行政の意識改革を入れたかと言うと、やはり市民が熱くなるのも、行政もやはりいろんな面で指導的などころがあるわけですが、そういうときに、やはり行政も熱くなっているのに、相手が熱くなるわけではないわけがあります。

ですからジオパークでの交流人口の拡大についても同じことで、よそからおいでをいただいた人たちがなかなか感激しないのも、市民が自分たちのものに対して感激や感動もしていないのに、それができないだろうという形になるわけがあります。その同じ構図が、やはり対市民に対しての行政の考え方になるわけがありますので、やはり本当に熱き心に燃えて、この糸魚川市の地域の活性化や糸魚川市はどうあるべきかという、燃えるような職員が必要になるわけがあります。それが多ければ多いほど、やはり住民や、その市の活性化につながるんだろうと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

## ○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

## ○9番（伊藤文博君）

私もよく言う熱伝導のところですよ、やはりそこがしっかりしてないとだめだと思います。

チーム糸魚川は企画財政課、チーム市役所は総務課と言いながら、実際には、これはもう一体のものだとすると、市の職員は全員チーム糸魚川の一員である。どうもやはりチーム糸魚川というと、庁外にできた各種団体の連携団体、グループであって、チーム市役所は市役所、そういう感覚になりがちなんですけど、これは違うと思いますね。市役所の職員は全員、チーム糸魚川の一員である。果たして職員は、そういう意識を持っていますか、今の段階で。これからまた変えていけばいいんですけど、どうでしょう。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

金子総務部長。〔総務部長 金子裕彦君登壇〕

○総務部長（金子裕彦君）

冒頭、私のほうでもちょっと発言しましたけれども、チーム市役所、チーム糸魚川としての取り組みはまだまだ道半ばで、じゃあ市役所職員全体が完璧に浸透しておるかというところは、まだまだ伝導が伝わっていない部分もあるということで、今後も取り組みをしていくということでの、まだ道半ばということでご理解をいただきたいと思います。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

これからどうしようかという話で、今回、質問してると思っていた方がいいんですけど、部課長は会議の中で、やはりチーム市役所という話がどんどん出てくる。ところが課長が課に帰って、どこまで浸透させることができるか。チーム市役所という考えですよ、チーム糸魚川ではなくて。それすらも、やはり今の段階では厳しいものがあるだろうと思いますね。

そういう現状を踏まえた中で、市職員と市民との対応のところなんですけど、市職員が日常的に行政の立場でものを考えているのと、民間側が日常生活や経済活動の中で現状を受けとめて、問題意識を持ったり、どうあるべきかを考えたり、よい手法をアイデアとして持ったりするところには、食い違いや隔たりを生ずるところも多いと思います。

法律、条例等で縛られたものと、全然そういうものにこだわりなく考えているものでは、当然、そごが生じる面もあるでしょうね。だからどちらが正しいかは一概には言えない。しかし、どちらもお互いの立場に立って意見を聞いて、最もいい方向を探らなければならないということだけは確かだ。法律や条例、規則に縛られているとさっき言いましたけれども、その範囲の中で柔軟な対応が求められると。

しかし前例がないことや、それから逆に慣例に縛られたりというようなことの中で考え方に制限が出てきて、ここの答弁でもよくありますよね。県内20市の例を云々、先進事例とかという発言が多くみられるように、なかなか発想の転換に結びつかない。みずからが先進事例になろうという気概が不足しているという感じを強く受けますね。この辺は、どう考えていますか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

田原総務課長。〔総務課長 田原秀夫君登壇〕

○総務課長（田原秀夫君）

お答えいたします。

1つの事業を行うときに、行政と民間、市民が一緒になって、それぞれの立場で知恵を出し合っ  
て、1つのものに対して考えていく。お互いの不足を補いながら進めていくということが、大切だ  
と思っております。

その中におきましては、市が計画を立てたものが、そのまま市民の意見を聞かないで押し通すこ  
とのないように、また、市民の方々への事業説明会、ヒアリング、そういうものの機会を通して意

見をお聞かせいただく、意見交換をさせてもらおうということを進めておるところでございます。

ただ、先ほど話がありましたように、ある程度の事業におきましては、さまざまな条件をクリアをしなければいけないということもございますので、市民の皆さんのご要望が、そのまま事業に反映することが難しい場合もあります。そういう場面につきましては、よく状況、また条件、そういうものを説明をして、ご理解いただけるような十分な説明を繰り返し関係者の皆さんに行っていくという、そういう取り組みが大切だと思っております。

以上でございます。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

やっぱりそういう話を受けたときに、市の職員に建設的な態度があるかどうかということが、大きな違いだと思うんですよ。できる、できないは、その結果である。どうもそのできない理由をぼんぼんぼんぼん出してくるような人が、結構いると思いますよ。でも、本人はそう思っていないですね。自分は考えてるとずっと言ってるけど、もう否定、否定、否定になっちゃって、マイナス思考の人だねっていう話になっちゃう。

組織を建設的な発想、姿勢を持った集団にかえるということは、非常に大きなエネルギーが必要とされますね。そのエネルギーは情熱から生まれる。それも一時的な情熱ではなくて、粘り強さが要求されると思います。糸魚川市役所という大きな集団にとって、それはどこから発せられ、どのように伝達され、そしてどのように維持されるべきでしょうか。ここは大きな源ですよ、どうぞ。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

私もそうだと思います。それは事柄によって私は違うと思います。発信する場所は、やはりその事柄によって、その内容によって、事業によって出ていくと思うわけでありますが、やはりそれがなかなか、私はまだまだと言いましょか、私はまだまだ本当にそうやって動く職員のほうが、少ないんだろうと思っております。まだまだやはり自分たちは公務員なんだという意識が、しっかりとよろいを着たような形になっている部分が、多くなってるわけでありまして。

しかし、前段での一般質問でもあるように、今はそういう時代ではないんだぜと、もうこれからの5年、10年、15年先はどうなるんだというこの時期に、やはり今やらなかったら、それは大きな事柄になってあらわれてくるんでないかという危機意識が大切であるわけでございますし、私も昨年の大きな節目のときに、そういうものを感じたわけでありまして、もし自分が、そういった仕組みをしっかり構築できているならばさらにいいんですが、そこまで出てないにしても、やはりそういう危機意識を感じたときに出しながら、職員とともにそれを乗り越えていきたいということで、今、チーム糸魚川であり、チーム市役所であると思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

ここはまさに意識改革であって、それで私がいつも言ってます熱伝導で、熱源はやっぱり市長だと思っんですよ。その市長の熱をどう伝えられるかが重要である。直接伝わる場面をふやすべきだとは思いますが、間接的に伝わる場面が実は重要だと考えるんですね。

市長と例えば職員でミーティングをして、そこで熱が伝わっていく。今度は、それをどう持続させるかです。やはり市長の熱が部長や課長たちに伝わって、それぞれが熱源となって職員全体に作用する。1人の職員に複数の熱源が作用するというようなことの中で、組織全体が熱を持ったものになっていくと。職員の意識を変えて組織全体が変わるには、そういう取り組み、過程が必要だと思いますけど、どうでしょう。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

金子総務部長。〔総務部長 金子裕彦君登壇〕

○総務部長（金子裕彦君）

お答えいたします。

伊藤議員がおっしゃられるように熱源の基本のところ、市長さんの熱い思いを直接伝えていただくこと。私どものような部長、あるいは課長が、その熱を感じて自分も熱源となって伝えていただく。議員がおっしゃられるような方法が、組織全体を意識改革していく大きな手法だと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

具体的にどうするかですけど、何でもすぐ始めたらいいと思っんですよ、形づくらずで。待たなして取り組んで、やりながら改善して、失敗したら手直ししていく。意外と、思わぬような取り組みが生まれてくるかもしれませんよね。行政は、どうしても先に仕組みをつくらうとするので限界がある。それに時間がかかる、後手を踏むということになる。検討に時間をかけることが、できない理由を探る1つの行政特有のパターンになってしまうという傾向もあると思っんですね。まず、行動する。行動しながら、常に情熱を持って改善していくというようなやり方も、どんどん試していくべきだと思いますけど、どうでしょうか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

金子総務部長。〔総務部長 金子裕彦君登壇〕

○総務部長（金子裕彦君）

お答えいたします。

現在の変化の激しい社会の中においては、先ほど言いましたように前例のない課題というのが非常に多くあります。その中では試行錯誤、やりながら考え、またその中で気づいた点を直しながら、

そしてまた新しいものにチャレンジしていくということで、チャレンジをしながら、失敗しないにこしたことはないんですけども、小さな失敗を繰り返しても新しいものにチャレンジしていく、そういう取り組みが、意識改革の中で非常に必要だというふうに思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

やる気のある若手が、これまでの慣例にとらわれない発想で上司に提案すると。上司は前例がないとか、これまでのやり方と違うとか、あげくの果てに、これまでこうやってきたんだから、そんなことは考えんでもいいというような話だってある、そういう話を聞きます。過去のやり方を粛々と踏襲すれば、公務員の役割を果たせると考えているという傾向があると思うんです。ここを何とか打開していかなきゃいけないんですね。

職員と話をしますと、若手はやる気があり、何とかしたいと、しなければならんと思ってるんだと、僕の話なんか聞いた職員がそう言う。だけど抵抗勢力がいるんですよという話、組織の中でそれが誰かっていう話はしませんよ、ですけどそういう形がある。それは1人じゃなくて、組織としての抵抗勢力かもしれない。こういう現状をどう捉えますか、それをどう変えていくかということですね。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

私も職員と結構会話するのが好きで、いろんな職員と話をします。やはり職員は、いろんなそういったハードルを言います。当たり前じゃないかと。ハードルがなかったら、みんなやってるよと。そのハードルを、みずからがどうやって越えるかを工夫せえと。そのハードルが低かったら低いほど、この結果はよくないよと。高いハードルほど、乗り越えることが大きな結果につながるんだぜと。そのハードルを、みずからの今の組織のハードルの中で越えられなかったら、やはりよそのハードルなんかも越えられるわけじゃないかと、よくそういう会話をさせていただいております。やはり当然、それはあってしかるべきだと思うわけでありまして。そういういろんな条件や可能性、そういうものを説得できるだけのものを自分たちがつくれと。やはりそういったものをつくること、これはもう行政の仕組みだろうと思っております。いろんなハードルがあるのを、それを乗り越えることが、私は大事だろうと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

市長、それは例えば財源の問題だとか、制度上の問題とか、そういうハードルならいいですよ。それはやはりさっきから言ってるような、上司がもう前例のないことはやらない、新しいことに取

り組まない、前のおりやっついていけばいいというハードルだとしたら、そうじゃないというところへ持っていかなきゃいけないでしょう。それは財源まできっちり用意して提案してきなさいというのは、それは職員を鍛える話ですからいいと思いますよ。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

いや、それ以上だと私は思っとるんです。要するに表立って、それは誰が見てもやはり1つ通過していかなくちゃいけないものもあるだろうと思うわけでありますが、もしそれがだめだったら、どういう方法があるんだと。それは自分たちのやってる仕事なり事業は、自分の子供と一緒にだろう。それを生まなかったら自分の職務に全うできないというぐらい、その思いがあったら、それをどうしてもつくりたいという気持ちがあったら何が何でもやるという。それをどうやったらできるか考えることが大事だろうと。もし、行政でできなかったら民間へ持ち込むだとか、また、いろんなやり方だってあるわけですよ。そういったところを研究して、だめだったら常にそういうのを頭に想定しながらいろんなことが、民間だったらやってるぜという話もさせてもらっています。

ですから、これは1つの職員との会話であるわけでありますが、当然、そういうハードルをどうやっていくか、直接、逆には市長のそこへ持ってくる方法だってあるだろうと思うわけですよ。だからそれを手順どおりやっついていながら、1本の道だけではないというのを理解してもらいたいという話を、よくさせてもらっております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

その1本の道だけじゃないということが、職員に浸透するということが大事だと思うんですね。例えば年功序列の人事では、やる気のない上司の下に配属されたら、これは悲劇なんですよ、さっきの話です。しかもその上司は、案外自覚がない、私だって一生懸命やってるという感覚ですね。部下は異動になるまで我慢するしかないというところから、何だ、大して頑張らんでも、務まるじゃないかということになっちゃうというようなところを、何とかしなきゃいかんということですよ。やる気のない人間にはというか、やらない人間には務まらないということが重要だと気づくと。先ほど市長が言われた、やる気があれば何でもできるだろうというところに、やっぱり制度的にももっていかなきゃいけない。人材の適正な評価と配置が重要だという考え方が、そこから出てくるわけですけど、年功序列をやめませんか、どうでしょうかね。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

年功序列だけではないと思っております。やはりいろんな観点から判断をさせていただいて、結果は、そういうような見方をされる部分もあるかもしれませんが、決して年功序列を頭に置いて人事をいたしておりません。いろんな観点から、また、いろんな見方をしながらさせていただいておりました、それから出てくる問題、課題も、本当にやってみなければわからないようなところもあったりもして、皆様方は気づいている部分があるのかもしれませんが、我々は、してから気づく部分もあって、非常にいろんな事柄が起きているのもあるわけでありまして、なかなか失敗のないようにと思いつつ、いろんな事柄が起きるのも現実であります。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

課長、部長になると権限がある。課長、部長を前にして言うのも何ですけどね、考えた事業を展開することができるし、部下のいいところを生かすこともできると思います。

しかし定年を数年後に控えたその時期になって、年功序列でその立場になる。実力があればいいですよ。年功序列でその立場になっても、糸魚川市の将来を考えた積極的な一歩踏み込んだ取り組みができなくなってしまうということがあるとしたら、そのような人事を繰り返している限り、糸魚川市はよくなると思うんです。だから年功序列だけじゃないんです。ここに40代の課長がいたっていいじゃないですか。今後は、そういうこともやっぱり考えていくべきだと思いますが、どうですか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

私も40代、30代と限って言われると、ちょっと現実にはないと思っておりますが、しかし私は市長になって、今までにない取り組みをさせていただいたと思っております。全てではございませんが、おまえ、そんなことを言ったって、ほんの一部じゃないかと言われるかもしれませんが、そういう気持ちで取り組まさせていただいているのをご理解いただければ、ありがたいと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

茨城県牛久市の取り組み例ですけど、週3回の朝の会というのを9時からやってる。そこで市長、副市長、部長がいて、そこに職員が直接来て事業提案をする。財源までしっかり調べ上げて資料をつくってくると。そこでもう決裁を受けるという仕組みがあったそうです。もう勉強するし、企画力はつくし、先ほど言った財源まで明らかにするんで、本当に掘り下げた研究までしてくる。何より中間管理職の能力に左右されずに提案できるという強みがある。大変参考になる取り組みだと思います。

うんです。このとおりということではないと思うんですけど、やっぱりこういうことが職員のやる気を促進していく。

先ほど市長が言われた、道は1つじゃないというところを実際に仕組みの中でつくっていくということになると思うんですけど、どうですか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

非常に今お聞きして、すごいことをやってるなど感じる次第でございまして、またいろんなそういった情報なり見させていただいて、ぜひ自分たちも、もし生かせるものなら生かしていきたいと思います。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

このあたりは、また行政改革の委員会でも取り組んでいくと思いますので、またそこでしっかりやっていきたいと思います。

今の話でもう1ついいところは、朝の会で提案しなきゃいけないというところがいいんですね。だから係長、課長を経由しないで、もうそこで持っていけるということが、1つ自覚も変わってくると思います。

民間との対応ですが、1つには行政側は、民間といいますと申請する側と許認可する立場という1つの構図がある。それだけじゃないんですけど、そうすると今度、市は市民側が提案したものを援助していく立場が多いですよ、先ほど言ったサポートする、プレーヤーとサポーターの立場。そういうところで、できない理由を並べる責任者がいるとしたら、これはやっぱりそこを改善していかなければいけない。何とかしようというところから入るわけですね、まず。そしてもう一汗かいて、庁内の横の連携より自分の課ではだめだけど、どここの課でこういうのがあるから、もうすぐじゃあ呼んできて一緒にやるというのが、さっき言ったような話につながっていくわけなんですね。今までにない取り組みをしようとする、考える職員を育てていかなければいけない。

そして、また一步踏み込む努力をしない人は、管理職になるべきではないと私は思うんですね。そして管理職になるときに、改めて管理職になる職員に覚悟を定める機会を与えるということも大事なことだと思います。ああ、おれの順番がきて、おれは係長になった、課長になったということではなくて、その課長になった節目に相当厳しいやはり覚悟を定める機会を与えるということが、非常に重要になってくるんじゃないかなと私は思うんですけど、どうでしょうかね。今、何かそういう制度はありますか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

織田副市長。〔副市長 織田義夫君登壇〕

○副市長（織田義夫君）



お答えを申し上げます。

課長になったときに非常に大きな権限もありますけども、責任もあります。それともう1つは、やはり議会対応が一番大変だということでありまして、そういう点では大変大きな課題ではないかと思っております。そういったことで課長になればなつたで、非常に課長になる前とは、また違った大変さが十分あるということです。

以上です。

○9番（伊藤文博君）

いや、大変さがあるというだけで、答えになつたらんで、答弁になつたらへん。

○議長（樋口英一君）

答え、答弁になつたらんで。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

いや、それは課長になるのは、非常に大変だというのはわかつたんですけど、それをやはり本人に自覚してもらおう、改めてですよ。当然、わかつてることだろうけど、改めて自覚してもらって、それで例えばその課の課長だということのほかには他課との連携をとって、部長とのコミュニケーションをよくしながら、部下を上手に使っていかなきゃいけない。今までの数倍の仕事をしなきゃいけないということに対しての覚悟を定める機会を与えてやるというのが、課長になる人に対しても必要なことだと思うんですよね。なきゃないでいいんですよ、だから今後、考えてもらえればいいんですが。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

織田副市長。〔副市長 織田義夫君登壇〕

○副市長（織田義夫君）

お答えを申し上げます。

課長になりますと、やはり自分の課の運営をしなきゃならんということでありまして、職員も育てなきゃならんということで、非常に課長になった段階のときは大変重い責任を感じて、その辺のことは、なる前となつた後では、全然違うというふうに私は考えております。私自身も課長になつたときに大変重い責任と、それから宿題をもらったということで、そのときには十分感じたところであります。

したがって、皆さん各課長は、課長になつたときには、大変自分は重いものであるということで、その辺の責任と、それから課の運営をするということ、それから職員を育てるということで、大変重いものを感じているのではないかと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

それじゃあさつきと変わらんけど、まあいいわ。ですから、そういう機会をつくったほうがいいと思いますよ。それは例えば市長との個別面接でもいいと思うんですよ。やっぱりそのときに市長がどんな話をして、改めて自覚を促すかと、そういうことの機会を設けたほうがいいんじゃないですかということ言ってるんで。

答弁がありそうですから、どうぞ。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えさせていただきますが、今言ったように、やはり公務員という形になったときから、課長、または係長というのを見てきてるわけでございまして、当然、どこかの配属になるわけでございますので、そういった1つのポジションを見てくるわけでありまして。そういう中で、長い間の中で、課長というものはどうなんだというのを考えてなるわけでありまして。

また、現在は部課長会議をやとるわけでございまして、その中でも、たびに、私はいろんな事柄を話させていただいております。そういう中においては、やはり事業の厳しさ、そして人事の厳しさ、また、いろんな話を時折々にさせていただいております。そういったところが、やはり自覚がだんだん高まってくる場ではなかろうかなと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

教育論みたいになりますけど、戦後教育の1つだめなところは、覚悟を定めるということを教えないことなんです。やはり我々は生きていく中で、いろんな節目のときに覚悟を定めるということを、やっぱり習慣づけていかなきゃいけない。市の職員の中でも、課長になるときの課長の重要性というものを、覚悟を定めさせてやる機会というのは、つくるべきだと思いますよ。ちょっとかみ合わんので、そこはもう通り過ぎます。

チーム糸魚川の会議にトップが出てきて、その後、組織内への浸透ができていないと。いまだにトップ以外には、今ごろまたチーム糸魚川なんてつくってという声があるのが現実です。これは聞こえてきます、我々には。これが全てじゃないですけどね、そうじゃない人もいますけども、そのような実態がある。本当のチームになり得ていないところを、今後、どうしていくかということですね。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

これからの活動の中において、やはり今言ったように職員、またそして当然、私も含めてなんですが出向いて行って、その辺の我々の考え方、このチーム糸魚川の考え方をしっかり理解してもら

えるように、やはり顔と顔を合わせながら、やっていかななくてはいけないだろうと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

市長が熱源となって、それを伝えていくという場面も、これは本当に重要ですけど、いろいろな段階の会議だとか柔軟な協議体、いろんなどこの話をする機会という、そういうものの形成によってコミュニケーションの徹底を図って、連携を深める中で、チーム糸魚川意識を高めていかなければいけない。先ほど言った市へ来て打ち合わせしてる中で、市の中で連携をとっていくことで、また市民側も、ほかの団体と連携につながっていくというようなことも含めて考えていく必要があると。

だからチーム糸魚川の会議を頻繁に開いたって、多分、僕はそれほど浸透という意味では期待できないと思うんですよね。それはそれで意味はありますよ、会議の意味がないんじゃないかと、ただ、チーム糸魚川が本当に形成され、末端まで浸透していくかということに対しては、もっと違う手法、あらゆる角度から、いろんな取り組み方をしていかなきゃいけないと思うんです。やっぱり2歩も3歩も踏み込んだ対応をしてほしいと思うんですけど、どうですか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

米田市長。〔市長 米田 徹君登壇〕

○市長（米田 徹君）

お答えいたします。

まさに今までのような1つの取り上げ方では、いけないだろうという今のご指摘だろうと思えますし、まさしくそのとおりだと思っております。

いろんな会合の中において、ただ一人が、市長だけでやっとならばいいということではなかろうかと思うわけでございますので、その辺の熱い思いをみんなで出していかななくては、短期間には広がらないというご指摘だろうと思ってるわけでありまして、そういった仕組みが大事だと思っておりますので、そのようになっていくように、今、形を整えながら、進めさせていただきたいと思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

チーム糸魚川として、いつでも、誰もが集まることができる本拠地といいますか、何かやっぱりそういうものがあつたらいいですね。それが自然にどこかに定まっていけばいいかもしれませんが、それが柔軟なコミュニケーションのもとになっていくと。だから先ほど言ったような取り組みの中で、そういうものができていくかもしれません。

場としての核ですね、それから人として非常に熱意にあふれて中心になっていく核、人としての

核、そしてその人が、今度、組織へと発展していくというような広がり方が理想的なわけですよ。でも、やっぱりそういうことを念頭に置いて、いろいろな会議体のつくり方だとか、協議体のつくり方、協議の場のつくり方をしていかないと、取り組み方をしていかないと、なかなかそういうふうになっていかない。そのことをしっかり意識するというのが、まず大事だと思うんですね。

今、いろんな話をしてきましたが、これを具体的にしていくために、さあ、どうするかというところを、やはりどこかで本当に踏みとどまって、しっかり考えなきゃいけないと思いますが、総務部長、担当としてどうですか。要するに、実務者としてどうします。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

金子総務部長。〔総務部長 金子裕彦君登壇〕

○総務部長（金子裕彦君）

チームワークを高めていくためには、1つのことに向かって、みんなで取り組むということが重要であります。そういう中で、チーム糸魚川の中では今年度の取り組みとしては、みんなで糸魚川応援隊の獲得運動をして、その人たちの力も借りて、糸魚川の情報発信力を少しでも高めていこうと、口コミで高めていこうという取り組みをいたしております。それが1つの手法だと思っております。

それだけでじゃあいいかというのは、議員さんがおっしゃるとおりであります。いろいろな角度から、取り組みをしていく必要があります。また、お互いのチーム糸魚川の組織団体の取り組み、活動を相互に理解し合いながら協力していく。それで外へ向かって、また情報発信をしたり、新しい物事を共同でチャレンジをしたりというところに、つなげていく必要があると思っておりますが、今後、チーム糸魚川の活動を進めていく中で、徐々に慣れてまいりますけれども、そういう取り組みを広げていきたいというふうに思っております。当然、その取り組みの中の一員は市役所の職員も、先ほど来、お話がありましたようにチーム糸魚川の一員でもありますので、そういう取り組み姿勢の中を市役所の中からもつくっていくということが大事でありますし、そういう取り組みを進めてまいりたいと思います。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

今、実務者としてどうしますかっていって、いきなり具体的な話って、なかなかできないと思うんですが、やっぱり考え方がしっかり根づいていくということが、まず大事でしょうから、いろいろな場面でやはりそれを展開していく。

今、糸魚川応援隊募集の話が出ましたが、市民一人一人が、1人の応援隊員を集めることも、4万7,000人を目標とすると言ってるんですけど、今の段階で、まだ市民のほとんど理解してないですよ。どのように市民に広げて広域に展開していくかということに尽きると思うんですけど、尽きるというか、それがまずしっかりと取り組まれないといけないと思うんですけども、どうですか。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

齊藤企画財政課長。〔企画財政課長 齊藤隆一君登壇〕

○企画財政課長（齊藤隆一君）

4万7,000人の数字は、大変重い数字だろうというふうに受けとめておりますけれども、目標値として掲げたものなんです。

広報紙と、あるいはまた市のホームページというのは一般的な話でありますけれども、先ほども渡辺議員のところで少し申し上げましたように、やはり口から言葉で伝えて理解をいただくというところが、これまでの登録の中では一番多かったわけありますので、やはり機会を捉えて口コミで、口伝えをお願いをしていく。趣旨を理解をしていただいて、登録をお願いしていくというやり方。それは会議等もありますけれども、いろんな機会を捉えながら取り組みしていくという、地道な取り組みが必要になるだろうと思っています。

もちろん市役所だけで、これをやるということではありませんけれども、構成23団体の末端までいくと、例えば組合員というような話になりますと、万単位の人数になる組織も抱えておりますけれども、そういったところで構成団体が、それぞれに今のような取り組みを少しずつでも展開することによって、すそ野が広がるというふうに思っておりますけれども、簡単にはなかなか広がらない。それは覚悟はしておりますけれども、地道に活動をしていきたい、そういうふうに思っております。

〔「議長」と呼ぶものあり〕

○議長（樋口英一君）

伊藤議員。

○9番（伊藤文博君）

最後に、短期・中期・長期にチーム糸魚川を考える取り組みが必要だと思うんですね。短期が例えば来年の3月までだとすると、この1年間は、まさにチーム糸魚川が、そしてチーム市役所がチームとして機能するようにすること。簡単じゃないですけど、そういう形ができていって、そのチームで、今後、中期・長期の取り組みをしっかりと考えて、またやりながら改善していくような、本当の意味のチームワークのあるチーム糸魚川にしていくということが大事だと思います。取り組みを期待していますので、よろしくお願いします。

終わります。

○議長（樋口英一君）

以上で、伊藤議員の質問が終わりました。

本日はこれにてとどめ延会といたします。

大変ご苦勞さまでした。

〈午後4時48分 延会〉

地方自治法第123条第2項の規定により署名する。

議 長

議 員

議 員

+